
森崎ハーレム

ブッチャー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

森崎ハーレム

【Nコード】

N6946Y

【作者名】

ブツチャー

【あらすじ】

基本適当で無愛想。おまけに超鈍感な主人公、森崎一也。そんな一也の普通じゃない日常の話

一人目：過去の女

「森崎先輩ーい」

学校への通学途中、遙か後ろから声がした。この悩みのなさそうな声は奴か

「おーい、せんぱーい」

声は段々と俺に近付き、ついには直ぐ後ろにまで迫って来ていた

「……理名」

俺は半分呆れながら振り返る。すると予想通りの顔

「お早うございます、先輩！」

「アアオハヨウ、キヨウモスガスガシイアサダネ」

「うう、感情が籠って無いです……」

「朝っぱらからお前に会ったから、テンション下がった」
ふう、とため息をつく

「ひ、酷いです。流石に傷付けつきます」

「そっか？」

理名はヨヨヨと泣く真似をする。古典的だな

「今日は七海先輩と一緒に無いですね」

「アイツは風邪で寝込んでるよ」

「え？ 風邪！！ お、お見舞いに」

理名は来た道を戻ろうとする

「バカ、学校が終わってからにしろ。今来られたらアイツも迷惑だ」

「あう……分かりました、放課後にします」

「ああ、そうしろ」

「はい……」

しょんぼりとする理名。この理名は、小学校の頃同じクラブに所属していた先輩後輩の仲で、去年迄は俺の彼女だったりもする

二年の交際。それなりに上手くいっていて、キスまでは進んだのだが、同じく理名と小学校からの付き合いだった七海に、いつの間にか取られてしまった

ただ、別にケンカ別れした訳じゃないから、多少釈然としない気持ちもあるにはあるが、それなりに仲良くしている。ま、不思議な関係ではあるな

「そっか、風邪かぁ……なら明日のライブ無理かな」

「ん？ ああ、そう言えば七海も行くとか言ってたな。残念だったな、また今度にしるよ」

「いいえ！ 先輩の仇を討つためにも私、行きます！ それにこのチケットを取るためにどれ程苦労したと思います？ 例え雨が降ろうともゴキブリが降ろうとも私は行きますよ！！」

理名は拳を握り、力強く宣言をした

「がんばれ」

俺には無理だ

「はい！ あ……」

理名は頷いた後、横目で遠慮がちに俺の顔を見つめる

「どした？」

「い、いえ別に何でもありません」

「うん？ ……ところでそのライブって誰のライブなんだ？」

「え？ これはスカルクラッシュャーって海外の」

「スカルクラッシュャーだと！？」

理名の言葉が終わる前に俺は叫んだ。その名前には、それだけの衝撃がある

「ハードコア系のバンドで日本では数年に1度しかライブせず、そのチケットは数分で完売すると言っあれかー」

形容しがたい何者かに説明しながら理名の両肩に手を置いて、ガタガタと揺さぶる

「は、は、は、い、い、せ、せんばい、い、い」

「ど、ど、ど、ど」

「せ、先輩？」

「どうしてそれをお前が持っている!」

俺は取れなかったのに!

「うわ!?! え、えっと八ガキを一杯出して抽選で当てて……」

「エロい!?!」

「え、えろ?」

「もとい、偉い! よくぞ俺の為に手に入れてくれたな!」

褒美に頭をグシャグシャと撫でてやる。

「あわ、あわわ」

「明日の何時に出発だ! てか場所は!?!」

「ろ、6時に横浜なので3時には出発予定で」

「よし、明日2時に電話する！七海の風邪が治れば俺と一緒に
つてやるよ！！」

「あ、あの、風邪が治れば七海先輩と一緒に行けるのでは……」

「バカモノ！！！」

「ひう！？」

大きな声を出す俺に、理名は頭を抱えてしゃがみ込んでしまっ

「風邪を拗らせてしまっただろう？これは兄の優しささ……」

「先輩……」

キラキラした目で俺を見上げる理名。どうやら兄の優しさを通じた
様だ

「さあ、理名。学校に遅れてしまっよ？早く行くつもりはないか」

しゃがみ込む理名に手を差し出す

「はい、先輩！」

俺の手を取った理名はニッコリと笑い、立ち上がった

「しかし、棚からボタモチって奴だな。まさか生スカルが見れるな

んて」

「先輩、スカル好きだったんですね、知りませんでした」

「まあ、余り人に言っていないからな」

おそらく七海も知らないだろう

「しかし嬉しいぜ！」

「先輩が喜んで下さると、私も嬉しいです。七海先輩には申し訳無いのですけれど……」

「土産買ってやるっ」

「はい。………ふふ」

理名は嬉しそうに軽く笑った

「どうした？」

「いえ、先輩とデートって久しぶりだなって」

「何すつとぼけた、ひょうきんな事を言いやがるんだお前。久しぶりも何も俺達は……」

「はい？」

何のてらいもなく俺を見上げる理名

「俺達は……何でしょう?」

「コイツ、まさか……」。

「お、俺達ってまだつき合ってるんだっけ?」

「……………え?」

そう聞くと、理名は戸惑いや、不安が混ざった目で俺を見上げた

「いや、最近……てか半年ぐらい会って無かったし、恋人っぽい事
もしてなかった気がするからよ」

「ほぼ毎日会ってるじゃないですか。それに、嫌がるから……」

「嫌がる?」

「前にベタベタするの嫌だって。それに電話すると直ぐ七海先輩に
変わってしまうし……」

理名は少し拗ねた風に言い、ちらりの俺を見る

「……………あれって俺にかけてたのか?」

「全部が全部じゃないですけど……5回に1回ぐらいは」

俺は五分の1か

「……………悪かったな。てっきり七海に乗り換えたのかと思ってた。ア
ハハ」

「アハハって、七海先輩は女性じゃないですか！ いくらなんでも目茶苦茶ですよ……！」

理名は俺をキツと睨み、強い口調でいった。どうやら珍しく、本気で怒っている様だ

「ま、まあ、言われてみれば……って事は理名は俺に遠慮してたのか？」

「え？ ええ。先輩に言うよりかは七海先輩に……かな」

「七海に？」

「あ、いえ、その……と、とにかく！ 先輩と理名はまだ全っっつ然別れてませんよ……！」

「そ、そうか」

「危うく過去の女にされる所でした……」

「いや、なんかごめん」

さっきまで普通に過去の女だったわ

「別れたいと思ったらキチンと言います。だから先輩もそうして下さい」

「別れたい」

「ええ!？」

「冗談」

「せ、せんぱい！」

「はは」

それから膨れた理名をからかっていると、あっという間に学校へと着く

「それでは先輩」

「ああ。それじゃあな」

さて、じゃあ今日も適当に頑張るとするかな

二人目：義理の妹

「ただいま」

「お帰り兄さん」

学校が終わって家へ帰宅した俺は、まずリビングへ行った。すると寝巻姿でソファーに座りながらココアを飲む七海と遭遇する

「風邪はもう良いのか？」

「ちょっと辛いけど、朝程じゃないですよ。ありがとうございます」

大丈夫と言っているが、まだ少し調子が悪そうに見える

「どれどれ」

鞆を床に置き、七海の傍に寄って額に手を当ててみるが、いまひとつ分からん

「……………」

「ね、大丈夫でしょう？」

「手じゃ分かりにくい。動くなよ」

俺は七海の前髪をかきあげ、顔を近付けた

「に、兄さん!?!」

「で、で計るんだよ。昔は良くやったる?」

「で、でも……あつ」

何故か照れている七海と額を合わせると、やはり少し熱い

「まだ熱があるみたいだな。ココア飲んだら寝るんだぞ?」

「……はい、兄さん」

頷く七海をリビングに残し、俺は一階の奥にある自分の部屋へと戻る

「……明日のスカル、行けないかもしれねーな」

ベッドになっところがり、iPodでスカルを暫し堪能。マジでカッ
コイイぜ

「あいつ風邪引くと長いからな………あつ!」

俺が治せば良いんじゃないか!

イヤフォンを耳から引き抜き、部屋を飛び出してキッチンへ。綺麗
に片付けられたキッチンの食器棚下段に、非常用として缶詰が幾つ
も置いているのだ

「えつと……」

あつた!

「桃の缶詰、ダアーツ!!」

最強アイテムを手に入れた俺は、そのアイテムを冷凍庫に入れて冷やす

缶詰を冷やしている間に鍋で生米をことごと煮込む事20分弱……

出来たぜ!

「今行くぞ、七海」

テンションの割には小さい声と足音で、一階の七海の部屋へ向かい、そのドアを8ビートのノックで叩く

「な、何ですか一体!？」

「あ、悪い。つい……入ってもいいか？」

「え、ええ。構いませんけど」

「じゃ、入るぞ」

七海の部屋に入ると、病人特有のくすんだ臭いが微かにした

すっきりと片付けられた部屋のベッドで七海は辛そうな表情で横になっている。脇には水差しと薬が置いてあり、額には水タオルが乗せてある

「七海、お粥と桃食べれるか？」

「お粥ですか？ はい、食べれます」

タオルを脇に置き、ゆっくりと起き上がる七海。俺はそんな七海の傍に行つて背中を支えてやる

「に、兄さん、私、大丈夫ですから……」

「バカ、辛い時ぐらい俺を頼れ。いつでも支えてやるから」

スカルを代わりに見に行くし、それくらいしないと罰が当たりそうだ

「兄さん……。ありがとう」

「愛しい妹の為だ。礼なんか言つな」

「……はい」

「それでいい。お粥、一人で食べれるか？」

そう聞くと、七海は首を振って

「一人じゃ……。食べられないです」

と、上目遣いで甘えた

「分かったよ。ほら、口を開ける」

フォークでお粥を掬い、七海の口元にそつと運ぶ

「あ、熱いよ、兄さん。フーフーして欲しい」

「おいおい」

急に甘え始めたな、コイツ。熱でもあるのか？ ……あるか

しかたがなく息で冷ませながらお粥を食べさせ、桃もちよつとずつ食べさせる

「ごちそうさま、兄さん。美味しかったです」

ようやく全部食べさせ、口元を拭いてやった時には既に40分も経っていた

「それじゃ俺は部屋に戻るから、何かあったら携帯鳴らせよ？」

俺は七海の枕元に携帯を置いて立ち上がる

「……………うん」

少し寂しそうだな

「暖かくして寝るんだぜ七海」

「はい、兄さん。……………ありがとう」

七海の部屋を出て自分の部屋に戻り、携帯を見ると、着信が三件入っていた。相手は……………

「……………そっぴや見舞いに来るって言ってたな」

すっかり忘れてたぜ

それから理名へ電話をかけ直した俺は、既に家の前まで来ていた泣きそうな顔の理名を回収し、無事に七海の元へ連れて行ったとさ

つかチャイム鳴らせよ

三人目：レディース

「凄くいいライブでしたね！」

「ああ！ まさかあそこでローリングストーンとは思わなかったぜ
！！」

スカルクラツシャアのライブが終わり、俺達はファミレスで遅めの
夕食を取っていた

夕食後も俺達の興奮は醒める事が無く、会話は益々盛り上がっていく

「やっぱり、ライブは最高だな！ 臨場感や一体感がハンパない」

「はい！」

その後も数時間話をし、気が付けば深夜の1時過ぎ。慌てて駅へ向
かったが、時既に遅かった

「終電……いつちやいましたね」

シャッターが閉まった駅の前で、理名はポツリと呟く

「……ああ」

迂闊だった

「……どうします？」

「どっしりますと言われてもな……」

どっしりしよう

「ど、どこかに……」

「ん？」

「と、泊まりましよう……か」

理名は顔を伏せ、僅かに震える声で言った

「理名……お前」

「せ、せんぱいが行くって言って下されば、私は……」

「そんな金あるのか？」

「え？ えつと……」

理名は自分のサイフを拡げて確認する

「三万円程あります」

「いいなー。俺、余り金無いんだよ。俺はファミレスで寝るからさ、お前はビジネスホテルにでも泊まってきたな」

「え？ あ、わ、私、お金出します」

「ライブおごってもらってんのにホテル代まで出させられねーよ」

「な、なら体で払って下さい!!」

そう言った後に、理名は顔を真っ赤にさせた

「……………ぷ、くく！ あはははは！ お前、それ最高！ で、俺はこう言えいいのか？ それだけのご勘弁をお代官様！ あはははは」

「ア、アハハハ……………はあ。やっぱり先輩と七海先輩は似ていますね」

残念そうに、だけど何処かホツとした顔で理名は笑う

「ま、兄妹だからな。それでな、理名」

「はい？」

「成り行きじゃ無く、もっという感じの時に泊まるっな」

その後、咳込む理名の背をさすり、落ち着いた所でキスをする

「……………いじわるです」

拗ねたように呟いた後、理名は俺の手をギュッと握った

「さて、マジにどうするかな」

「さっきのファミレスで時間潰しましょうか？」

「あいよ。……ところでお前、家の方に連絡しなくて良いのか？」

「き、今日は」

「ん？」

「お泊りって……」

「……はは」

「わ、笑わないで下さいよお」

「悪い、悪い。じゃ行こうぜ理名」

「は、はい！」

ファミレスへ向かう途中も、そんな感じの甘ったるく話していると、少し離れた所で争う様な声が聞こえて来た

「ん、なんだ？」

「どうしたんですか、先輩？」

「いや、ちょっと……」

耳をすませると、女の怒鳴り声

「アア？ カンベンだ？ テメエ、舐めてんじゃねーぞ！！」

「おいおい、この後は公開蹂躞プレイだろうか？ 今から泣き入れ

てんじゃねえよ!！」

……穏やかじゃねえな

持ち前の好奇心が沸き上がってきやがる

「……先輩？」

「ん？ ああ、ファミレス行こうぜ……ダッシュで！」

俺は全力で駆け出す

「せ、せんぱ!？」

「俺を捕まえてみる？」

必死に追ってくる理名から適当な距離を守りながら、ファミレス前へと着く

「ハア、ハアハア。せ、せんぱい……」

「良くやったな、理名。もう俺がお前に教える事は何も無い」

「な、何かを教わったんでしょっか、今……」

「……ああ！ 財布だぜ、落したぜ、うっかりと」

「え？」

「探してくるから、先にファミレスで待ってる」

「は、はあ……私も」

理名が何かを言う前に、俺は全速力で先程の場所へ向かって走り出す

「あ！ せ、せんぱ」

「ちゃんとファミレスで待ってるよ」

「は、はい！」

よし、これで理名の事は安心だな。じゃ、さっさと行くべ

「確かこの辺だったな」

車道。右に住宅地へ続く暗い小道がある

「オラア！ はいずり回れよブタが！！」

「向こうか」

俺は小道の方へ曲がり、声の方へ歩いてゆく。そのまま少し歩くと、小さな公園前に数台の単車が停まっていた

公園内には赤い特攻服を来た女が、4、5人たむろしている

「あ？ 何だデメエ！？」

公園の中を見ようと足を止めた俺に、見張りらしき女が俺に声をか

けて来た

「野次馬」

「テメエ人間じゃねーかよ！ おちよくってんのかコラア！？」

その怒鳴り声に、公園内の連中も俺に気付く

「どーした、真知子？ つか誰よそいつ」

「あ、リーダー。何かコイツ野次馬とか言ってるんすけど！」

「野次馬？ …………… 馬じゃねーじゃん」

「り、リーダー。野次馬つてのは見物人みたいなもんで…………」

「なら最初から見物人つて言えよ！」

横からせつかく教えてくれたポニーテールの女の顔を、バキツと殴るリーダー

「す、すませっしたあ！」

後ろで腕を組み、直立不動のポニーテール

「とんだ馬鹿集団だ」

俺は俺を止める入口の女の手を払い、公園内へと入る。

公園内には女が五人。一人は裸にされ、しゃがみ込んだまま泣いて

いた

「テメエら……テメエらの血は何色だ!？」

「な!？ その台詞はあのお方の……な、何者だてめえ」

「俺は森崎だ。悪党に名乗る名は持ち合わせていねえ……」

「こ、コイツただ者じゃねっスよリーダー!」

「……ああ、アタイの勘がビシビシと伝えてくるよ。コイツはヤバ
いってね」

「わりいけど、今日の俺は女でも手加減しねーよ?」

生スカルを見たからな

「くっ! リコ、真知子、ミーコ、江里!」

「イエス・ユア・リーダー!」

女達は俺を囲むように、集まる。手には木刀等の凶器

「やっちまえ!」

リーダーの合図で、女達が一斉に襲い掛かって来た!

先ずは後ろのポニーテール!

「ローリングソバット!」

「グハア！」

次は右の真知子！

「ジャーマンスープレックス！」

「ゴハア！」

左の……… 忘れた！

「ムーンサルトアタック！」

「ぬぐあ！？」

上空の……… 上空！？

「南斗獄屠拳！」

「ひでぶ！」

最後は正面にいるリーダーだ！

「電気アンマー！」

「あ、ヤダア、ダメ！ ああん！？」

僅か数分の戦い。それが終わった後、地面に立っていたのは俺だけだった

「……また、無益な争いをしてしまったな」

戦いの後は、いつも虚しい

「あ、あの……」

裸の女が怯えた声で俺を呼ぶ

「ふ」

俺は黙って着ている上着を脱ぎ、それを女に着せる

「何かあったら俺に連絡しな」

「は、はい！」

それから赤外線で携帯番号を交換していると、背後でリーダーが起き上がり俺を呼ぶ

「お、おい、てめえ」

「……まだやるのか？」

「ア、アタイとも交換……しろよ！」

で、リーダーとも番号交換をし終え、別れの言葉もそこそこに俺は急いで理名の待つファミレスへと走り戻った

「いざっじゃ……いー？」

カランコロンと鳴る昔ながらのドアを潜ると、ウェイターの兄ちゃんが無故に驚いた顔をして俺を迎える

「待ち合わせだから」

「は、はあ」

怪訝そうな店員を避け、理名を探すと……お、一番奥の窓際か

「待たせたな理名」

「あ！ せんぱ……」

奥に行き理名に声を掛けると、理名は嬉しそうに振り向いて……そのまま固まってしまった

「……どうした？」

「せ、先輩、ふ、服は……」

「ん？ ……あ」

言われて気付き窓ガラスを見ると、そこに写った俺は上半身が裸の変態野郎だった

「………理名、一枚服貸してくれ」

「む、無理ですよー！」

四人目：熟れた果実

「夕、タダイマ……」

朝、10時。コソコソと家の玄関を開ける。初めての朝帰りだ、慎重過ぎて悪い事はない

右確認、左確認、正面確認

「……………よし」

俺の部屋は一階の右奥。途中、七海の部屋やリビングの前を通る必要があるが、七海の気配は無い

俺は差し足、抜き足、忍び足でゆっくり歩き……

「……………何をコソコソしているのですか？ 兄さん」

「うわ!?!」

振り返ると、いつ居たのか七海の姿。俺に気配を悟らせないとはい……

「今日はお早いお帰りでしたね」

ニッコリと笑う七海

「き、昨日電話で説明したじゃない……………ですか」

「ええ。聞きましたよ」

七海は笑顔を崩さない

「……あ、これお土産です」

スカル饅頭とスカル煎餅

「ありがとうございます」

「……」

「……」

「あ、あの、僕そろそろお部屋に……」

「ごんごん」

「は、はい」

再びゆっくりと歩き出す俺

「……」

「……」

「………な、何故僕の後に着いて来るのでしょうか?」

「リビングに用事がありますので」

「あ、そうでしたか……」

「……………」

「……………」

それから一言も発せず、俺と七海は目的の場所へとたどり着く

「つ、着きましたね」

俺はドアを開けて部屋の中に足を入れる

「ええ」

七海もまた、リビングへ続くドアに手をやり、開けようとしていた

「そ、それでは」

「はい」

そして俺は部屋に入り、急いでドアを閉めた

「……………」

会話の間、七海の表情は全く変わらなかった

「……………こ、怖いな」

何か機嫌をとらなくては

溜息を付き、トイレに行こうとドアを開けると……………

「ぎゃああああ!?!」

「わー!? び、ビックリさせないで下さいよ!」

「お前こそ何で俺の部屋の前に居るんだよ!?!」

「あ、いえ。多分また直ぐドアを開けるんじゃないかなあって……」

「お前は俺の心臓を止める気かよ……。出掛けて来るからな」

「また朝帰りですか?」

「……すぐに帰るよ」

しつこい奴だぜ

気まずい空気から逃げ出す様に、俺は家を飛び出した

「さて、七海の機嫌を取る訳だが……」

五月の日差しが目に染みるぜ

「やっぱり、基本は物か」

駅前でアイツの喜びそうな物でも何か買ってやろう

チャリンコに跨がり漕ぎ出そうとすると、声を掛けられる

「一せく〜ん」

「ん？ ああ、美弥子さん」

声を掛けて来たのは、隣りの家で庭の掃除している美弥子さん

美弥子さんは美人で優しく、俺達兄弟も大変お世話になっている、とても良い人のだが正直少し苦手な人でもある

今日は急いでいるし、なるべく係わり合いたく無いが……

「一也君、一也君、いーちーやーくーん！」

両手を目一杯振って美弥子さんはピョンピョンと跳ねる。大きい胸が、これまた大きく揺れた

「き、聞こえてますよ。今行きますから」

渋谷とチャリンコから降り、数メートル先の立派な一軒家の前へと行く

「良かった。突発性内耳障害になっちゃったのかと思ったわ」

美弥子さんは掃除道具を置き、俺の前に来た

「そんな浜崎さんちのあゆみちゃんみたいな病気にはなってませんよ」

「良かった。さ、家に入って」

「ち、ちょっと忙しいのですが」

「ほらほら」

素早くアームロックを決められ、ズルズルと家の中へと連れ込まれてしまう

「い、痛い、痛いですってもう！」

「あら、ごめんなさい」

腕を離され、通された和室の居間。大きめなテーブルと、淡い画風の掛け軸が目立つ

「お茶を入れるわね」

「お構いなく」

「入れるわね」

「……………はい」

相変わらず強引で逆らえん

俺は嫌な予感がしつつ、正座で美弥子さんが戻って来るのを待つ

「はい、お待たせ〜おっと」と

「あちー！？」

お茶が俺の股間にピンポイントっ！？

「わ〜大変〜。ちょっと待ってて今脱ぐから」

着ているサマーセーターを脱ぐ美弥子さん。黒いブラジャーからはみ出さんばかりの胸が、非常に魅惑的だが

「意味分かんねーよ！」

「ていー！」

顔に胸で抱き着かれ、押し倒される。うお〜柔らかかけ〜って

「み、美弥子さん、痛いってー！」

「痛いのは最初だけ〜」

俺のピンポイントに美弥子さんの指が！

「ぎゃ〜!?!」

「……何してるの？」

美弥子さんに襲われていると、突然上から幼い声が出た。胸から顔をずらし見上げると、廊下から俺達を覗き込むさっちゃんの姿

「お帰りなさい、桜子。待っててね、今新しいパパが出来るから」

「じ、冗談じゃ無いよ！ 助けてさっちゃん!」

「……助けて欲しい？」

さっちゃんは俺達の前に来て、しゃがみ込む

「パンツ見えてるわよ、桜子。はしたないぞっ」

「あんたが言うな！」

「…………お兄ちゃんも見た？」

「い、いや、見てないぞ」

「ふん」

「さ、さっちゃん？」

「見る？」

スカートを軽く捲るさっちゃん

「ち、ちよっと、さっちゃん！」

「クス。…………ママ、お兄ちゃんの嫌がる事したら駄目」

「え〜でもお」

「ママ」

「…………はい」

渋々と言った感じで美弥子さんは俺の上からどいた

「ハア、ハア……た、助かった。ありがとな、さっちゃん」

「パパになられたら困るもの」

「だよな〜」

「ふふ」

さっちゃんは妙に妖しく笑う

「じ、じゃあ俺はそろそろおいとまするから」

「あら〜大したお構いもしませんで」

「いえ、もう十分です！ さようなら！！」

俺は美弥子さんの家を飛び出し、自分の家に逃げ込んだ

「相変わらずとんでもねえ人だな！」

普段は良い人なんだが、たまに壊れから恐ろしい

「……………は〜」

何か買い物に行く前から疲れたな……

溜息を付き、俺は再びチャリンコに乗って駅前のデパートへと向かった

五人目：デパートの天使

それなりに栄えている駅前広場。その中でも一際目につく、八階建てのデパート。七海のご機嫌取りアイテムを買いついでに、取り敢えず俺はそのデパートへ入る事にした

デパートの中は日曜日と言う事もあり、中々混んでいる

「さて、何を買うかな」

俺はデパート内をブラブラと歩く

「……………くく」

「……………ぷっ！」

「ん？」

何故か俺を見て笑う奴らがいる

「何だっつてんだ？」

どうも奴らは俺の股間を見ている様な…………

「ぬわ！？」

お、おもしろし！？

「な、何でだ？ 何でなんだー！！」

ひざまづき、頭を抱えて叫んでいると、ポンと優しく肩を叩かれた

「大丈夫ですよ、お客様」

優しい声だ。だが俺は顔を上げる事が出来なかった

「……ほっといてくれ。俺はもう、アテント無しでは生きられない体なんだ」

「大丈夫です、お客様」

「え？」

顔を上げると、俺の視点に合わせる様しゃがんでくれている、制服姿の店員

優しい笑顔と、割と短いスカートから覗くむっちりとした太ももが印象的だ

「あ、貴女は……」

まさか……天

「私もよく彼氏とのプレイでおもらしをしています。でもそれは生きている証。健康であると言う証なのです」

「んなもんと一緒にするんじゃないねえ!!」

俺は店員の手を払い、トイレへと小走りで向かった

「しかし、いつ漏らしたんだ？」

トイレの大便所。鍵を閉め俺はズボンを下ろす

「……………ん？」

ズボンは濡れているが、トランクスは無事だ

「……………あっ！？」

さっきのお茶じゃねーかよコレ！！

テンパリ過ぎて気付かなかった…………

「……………たくっ！」

紛らわしい！！

俺は怒りの形相でトイレを出る。しかし…………

「は、恥ずかしいじゃねーか」

怒りはソッココ消え、羞恥心だけが残った

……………安いズボンを買おう

俺はコソコソとデパートの三階にある紳士服コーナーへ向かう

「だからアニキのKOKAN様に似合うネクタイを用意しろってんだろがぁ！」

「ん？」

三階に行きズボンを捜していると、レジの横で言い争う声がした

「ぬふうん。ネクタイ巻いてだべ〜」

こっそり覗いてみると、品の悪いアロハシャツを着た金髪リーゼントの男と、アニキと呼ばれたスーツ姿の背が低いメタボが衣料服売場の試着室前に居る

メタボの襟には鈍く輝く金パッチ

「ヤクザか……」

「パツツン、パツツンの太もも。たまらんのお」

「い、いや……ああ」

絡まれているのは先程の店員だ

「野郎……ふざけやがって」

俺のたまに起きる正義感が、ズブズブと湧いてくる。しかしヤクザと争うのは……

「そつだ！」

帽子やサングラスで変装すれば……………

見渡すとズボンや靴下、パンツ等の下半身に身につける物ばかりだ

「上半身コーナーは向こうかよ！」

なんつー変な並べ方だ！ 急いで帽子を……………

「い、いや！ 止めて下さい！！！」

「試着室でワテのKONISHIKI様にネクタイを巻いてもらうだけだべ〜」

ま、間に合わねえ！

「これしか無いのか！？」

俺は覚悟を決め、1番ジャストにフィットするソレを頭から被った

「ぐぶ。さ〜巻いてもらおうか〜」

「あ、ああ……………だ、誰か、誰か助けて〜！！！」

「待てーい！！！」

「何っ！？ 誰だ！！！」

「貴様ら悪がいる限り、お天道様にゃ雨が降る」

「き、貴様は!?!」

「悪を憎み、女の涙を晴らす男。人呼んで」

「へ、変態だあ、変態が現れたぞー!」

「ひ、ヒイイイ!? お、お許しを」

「ひ、人呼んで……」

ヤクザ達は逃げて行った

「……………」

「……………」

残された店員と俺の間に、沈黙が訪れる

「……………そ、それじゃ失礼します」

「……………はっ!? ま、待って下さい、ぶ、ブリーフさん?」

「……………もう何でもいい」

「助けてくれてありがとうございます!」

「いや、いいさ。気にするな」

俺は振り返り、歩き出す

「あ、あの！ 貴方の本当のお名前を！！」

「ふ。名乗る程のもんじゃないさ」

こんな格好してるのに本名なんか名乗れるかよ！

「ブリーフさん……………あっ！ あ、あの半乾きのズボンは、も
しかして…………」

「い、居たぞ！ マジでブリーフ被ってるぞ！？」

「困め、困めえ〜」

警備員共がぞろぞろと集まって来やがった！

「じ、冗談じゃねー！！」

捕まったら社会的に抹殺されるじゃねーか！？

俺は群がる警備員達を薙ぎ倒し、デパートの非常階段へと飛び出した

「ちくしょー！！」

一時間後、自宅

「んで、階段から飛び降りたんだよソイツー！」

「そうですね」

結局何も買えなかった俺は、先程起きた出来事を土産話にする。
… 他人事として

「ん？ あんま面白く無いか？」

「お話にリアリティが無いですよ。えっと……ブ、ブリーフですか？ そんな人が居る筈……」

ピンポンパンポン

町内放送が鳴る

「先程、11時頃。ブリーフを被った変態が〇×デパートに……」

「……………」

「……………な、居ただろ？」

六人目：幼なじみ

月曜の早朝。コンコンと部屋のドアを叩く音がする

「……………兄さん？」

「……………ん？」

七海？

「起きてますか？」

「寝てる」

「そうですか。朝ご飯出来てますから、顔を洗って来て下さいね」

ドアから離れて行く気配

「……………もう朝かよ」

昨日は色々あったから、まだ疲れが残っている感じだ

時計を見ると七時。まだ割と余裕がある時間だな

「……………起きつか」

俺は伸びをしながら起き上がり、そのまま部屋を出た

「おはようございます、兄さん」

「ああ。おはよう」

リビング奥のキッチンでは、既に制服に着替えている七海が、みそ汁を温めていた

「今日は早いのか？」

テーブルの椅子に座ってきんぴらゴボウをつまむ

「はい。もうすぐ文化祭ですので、先生と打ち合わせがあるんです」

「そういえば今日から準備期間だったか。クラス委員とか面倒だろ？」

うちのクラス委員長も散々ばやっていた

「そうでも無いですよ。私のクラスは皆しっかりしていますので、私がする事なんてほんの一部です」

七海は、みそ汁とご飯を俺の前に置く

「それでごめんなさい、兄さん。私はそろそろ学校へ行かなければなりません」

「そうなのか？」

「はい。朝からつるさくしてしまって、すみませんでした」

「いいさ。飯ありがとうな、気をつけて行けよ」

「はい、兄さん。行って来ます」

パタパタと慌ただしくリビングを出て行く七海

「クラス委員長ねえ」

俺んとこのアイツとは大違いだ

飯を食い終え、俺も制服に着替える

んで、朝ズバ

「おもいつきを辞めやがって……」

生電話好きだったのに

《此処で新コーナー！ズバっと朝から生電話！！》

「なに！？」

早速パクリか……やるな、TOS！

朝から姑の嫁への怒りを聞き、微妙にテンションが下がった所で学校へと行く時間になった

「よし、行くか」

家を出ると、空は若干曇っていた。まあ傘を持っていく程でも無い

「……おはよう、お兄ちゃん」

掛けられた声の方を見てみると、黄色い旗を持ったさっちゃん

「ん？ ああ、さっちゃん今日は集団登校か？」

「うん。月曜日だから」

「そうだったな」

この地域の小学校は月曜日と金曜日、集団登校をする規則がある

「いつてらっしやい」

「うん。お兄ちゃんも、いつてらっしやい」

軽く手を振るさっちゃんに見送られ、俺は学校に向かって歩き出す

学校迄の距離は歩いて30分。朝の運動にはちょうど良い距離だ

大通りじゃない為、車も少ないし、途中から木々が心地好い遊歩道に入る事も出来るので、普段の散歩道としても重宝している。だが

「あゝ何かだり〜」

朝ズバ見るんじゃ無かった

「いーちやつ！」突然後ろから首に抱き着かれた！　こんな事する奴は

「いてえよ、美鈴！」

首に巻かれた腕を外し、振り返ると予想通り美鈴の姿

美鈴は相変わらずシャツの第三ボタン迄開け、たいして無い上乳をチラ見させてやがる

「おいっす！」

「ういつす。ん？ 髪切った？」

「お、鋭い！ さすがタモさん」

「俺とタモりに共通点無いだろ。つかお前の場合、分かりやすい」

先週迄はセミロングのパーマだったが、今はショートに変わっている

「失恋が女の髪を短くするのよ……」

「飽きただけだろ？」

「暑くなるしね〜」

そう言って、軽く髪をつまみ上げる

「似合う？」

「ああ、良いんじゃないやねー涼しげで」

前は若干、暑苦しかったし

「さーんきゅ！」

美鈴は俺の右横に立ち、腕を絡ませる

「産休？」

「どついうボケよ、それ」

別に邪魔にならないので、そのまま歩く

「お前の所、文化祭何やんの？」

「部活？ クラス？」

「部活は分かるって。ライブだろ？」

美鈴は軽音部に所属している。確か部員が4人しか居ない弱小部だったな

「まね。2曲しか許可下りなかったけどさ」

「ふん」

「きょーみ無いね」

何故か嬉しそうな美鈴

「あんまりな」

「でも見に来てくれるんだよね？」

「時間が空いたらな」

空くだろうけどさ

「み、美鈴ー！ こ、こらあー！！」

何処かで聞いた事がある声に振り返ると、理名が小走りで向かって来る所だった

「んん？ あゝ、理名」

「あゝじゃないよ、美鈴！先輩から離れる」

「一也が嫌がって無いんだし、良いじゃない」

「うう……な、なら先輩を呼び捨てにするなあ！」

「うっさいなく幼なじみだし良いでしょ？別に」

「俺の彼女が来たし、そろそろ離れるよ美鈴」

「……はあい」

理名は昔から美鈴にだけはライバル心が強い

二人は同学年だが、美鈴は背が高くスリムなモデル体形の為、平均的な理名と同じ年には見えない。どうやらそのことも理名のコンプレ

レックスになっっている様だ

「せっかくー也と甘〜い会話を楽しんでたのにさ」

「う〜」

そして何故か美鈴も理名にはよく絡む。初対面の時からこんな感じだった

「相変わらず仲悪いな、二人とも」

「誰かが間に居ない時は仲良いわよ。ね、理名」

「み、美鈴！」

「む、聞き捨てならねえ事を言いやがる。俺が悪いみてーじゃねえか」

「自覚しろ〜」

美鈴は再び俺の首に飛び付き、ギュツと絞める

「お、おい！俺はニワトリじゃねーぞ！？」

「く、首は駄目！こらぁ美鈴！！」

たく、朝から疲れるっての

七人目：委員長

朝のチャイムが鳴る前のギリギリの時間で、教室へと入る。美鈴のせいで危うく遅刻する所だったぜ

「おはよっす」

廊下側の2番目、俺の席に座り挨拶をする

「おー」

「うー」

急そつに返事を返して来た奴らは、俺の席の前と後

「神山優太、独身ね」

「田村新之助だ」

二人は形容しがたい何者かに自己紹介をし、俺の席へと集まって来る

「一也、昨日ブリーフを被った変態が現れたって話、知ってる？」

優太が楽しそうに聞いてきやがった

「……知らねえな」

「そんな変態見かけたら、ぶっ倒してやる」

親父が警察官の新之助。新之助は正義感がハンパなく強い

「い、色々事情があるんじゃないか？ 多分」

「ブリーフを被る事情ね、……俺にはちょっと分からないや。彼を見た人が言うには彼、ビルからビルへスパイダーマンみたく飛び移ったらしいよ」

「成る程、一筋縄では無い変態と言う訳か。俺にその変態が倒せるのだろうか……」

悩む新之助

「多分二度と現れないから忘れて良いぞ、新之助」

朝のチャイムが鳴る

「はーい、みんな席に着いて」

そのチャイムと同時に、新婚ホヤホヤの清美先生が教室へ入って来たもうすぐ30歳とは思えない童顔と、優しい雰囲気の人気者の清美先生は、何故かピンクのエプロンを着けている。……いやマジで何でだ？

「起立、気をつけ……お早うございます」

きちつと挨拶するのはクラス委員長の宮永。無骨な眼鏡と、シャギーが入ったロングな髪が特徴だな

「はい、おはようございます。それではまず今日の予定と出席を…」

先生は一人一人点呼を取り、欠席が無い事を確認する。つか何でエプロン？

「はい、みなさん居ますね。それで、ええと……今日から文化祭の準備を始めるのですが、今日は1時間目と2時間目を使って、みなさんの分担を決めます。クラス委員の二人、前に出て来て下さい」

「はい」

「分かりました」

前に出る宮永と北村

「それでは、宮永さんと北村君。進行お願いね」

「はい」

コンコンと教室のドアが鳴る

「清美先生、少し良いですか？」

「海田先生？ 宮永さん、北村君ちょっと任せて良いかしら？」

「はい、先生」

しっかりと頷く宮永

「ありがとうございます。お願いします」

先生は教室を出て行った。てか誰かエプロンの事聞けよ

「……………それじゃ、始めるから」

先生が居なくなり、宮永は急に態度が変わる

「始まったね」

優太が苦笑いと共に振り返った

「ああ、そうだな」

「うつさいそこ！ ……いい？ 基本あたしやる気無だからあんた達が自主的に頑張るのよ！」

「み、宮永？ 僕らクラス委員なのだから……………」

「じゃ、あんたが頑張りなさい。あたしはあんたを温かい目で見守ってあげるから」

そう言つて宮永は教壇から降り、教室の端の余っていた椅子へドツシリと座り込む

「み、宮永」

「情けない顔するな！ あんたクラス委員長でしょ！？」

「そ、そうだけど……………はあ」

北村はため息を付き、仕方ないと言った風に黒板へ分担する仕事を書き出した

「相変わらず宮永は凄いよね」

「あいつぐらい裏表がハッキリしていると、逆に清々しいよね」

コソコソと話している内に北村は黒板に書き終える

「そ、それじゃ分担を決めます。先ずはやりたい方に手を挙げて下さい」

うちのクラスはクレープと喫茶店をやる

基本的に食い物関係は当日こそ大変だが、準備する事があまりなく、精々看板を用意するぐらいだ

では、どちらがより簡単で客が来ないか。答えは簡単

「俺、喫茶店ね」

俺が手を挙げると、何人かも手を挙げる。正解だよ、お前ら

外でやるクレープは次から次へと客が来ると予測出来るし、火や鉄板を使う作業は地獄と化すだろう

対して教室でやる喫茶店。飲み物と、シュークリームを出すらしいが、所詮出来合い物を出すだけだ

それに喫茶店は客の回転が少ない。例え満席になろうとも、そんなには忙しくならない筈

「……あたしも喫茶店！」

眼鏡のフチを押さえ考え込んでいた宮永が、手を挙げた。そして俺を見る

(やるわね、あんた)

(ふ、お前も気付いたか、宮永よ……)

宮永とアイコンタクトをしていると、クラス中の連中が一斉に手を挙げた

「俺も喫茶店だ！」

「私も、私もよ！」

「クラスが誇る二大無気力が手を挙げたんだ……これは楽だぞ！」

「誰が無気力だ！」

「誰が無気力よ！」

宮永と声が揃う

「いい？ あたしは無気力じゃないの。やる気が無いだけなの」

「俺は面倒臭いだけだ。無気力なんかじゃない」

俺達がウンウンと頷いている中、クラスメートと北村は俺達を無視してホームルームを進行していた

「では28人が喫茶店ですね」

「全員じゃねーか!？」

「仕方ないよ。何だかんだ言って宮永は人気あるし、一也と一緒にだと面白い事起きそうだしね」

優太は爽やかに微笑む。人を喜劇役者みたく言いやがって……

「ちよつと人数が多過ぎますので、半分に分けたいと思います。そうですね……喫茶店の方にはクレープ店の屋台設営と、買い出しもやってもらいます」

「な、何い!」

屋台の設営は骨組みを組み立て、テントを被せる非常に面倒臭い作業だ。買い出しは言わずもがな

北村の野郎、キテレツみてえな顔してる癖に中々えげつない

「えーじゃあ私、クレープでいいや」

「え? じ、じゃ私も」

数人がクレープの方へと移る。残りは20人だ、後6人が消えなくてはならない

(宮永！)

(ええ！)

「買い出しって面倒なのよね。何回も行かなきゃならないし、領収証が必要だから釣銭ごまかせないし」

「屋台の設営？ あれ手が荒れるんだよな、手袋してるとあせもが出来るしよ」

俺達が面倒臭さそうに呟くと、クラス内がざわめく

「あせも嫌だなあ」

「買い出しって要はパシリだろ？ それはちょっと」

そして6人がクレープの方へと移った

(くく、あせもが嫌だと？ 夏場に鉄板でクレープを作る方がよほど出来るわ！)

(ふふ、買い出しが嫌？ 自分以外の誰かに行かせればいい事でしょうに！)

「くく、くく、ははははは！」

「ふふ、ふふふ、あはははは！」

「やる気あるね、2人とも。2人を買出しと屋台設営のリーダー

「にして良いのかな？」

「……………良い度胸だな北村？ 俺と」

「このあたしを敵にするなんてね」

俺達は北村を睨みつけながらゆっくり近付く

「ち、ちよつと、ふ、2人とも!？」

「くくく」

「ふふふ」

腰を抜かした北村に手を伸ばし…………

ガラガラとドアが開いた

「遅くなって、ごめんなさいね。…………どうしたの？」

清美先生がキョトンと俺達を見つめる

「大丈夫？ 北村君。急に貧血なんて起こして」

「北村！ お前寝不足の体で無理を…………」

「え？ ええ!？」

戸惑う北村を俺達は両脇から支える

「……なあ、北村よ。余計な事を」

「言わないわよねえ？」

「……はい」

誠心誠意な説得が効いたのか、北村は頷いた

「大丈夫？ 北村君」

「は、はい！ すっごく大丈夫です！！」

「そ、そう……」

「それでは北村君に変わりに私が司会を引き継ぎます。テント設営リーダーは北村君に決まりましたが、買い出しの方は……」

俺は教卓で堂々と司会をする宮永の勇姿を見て振り返り、席へと戻った

（良くやったな宮永）

で、2時間目終了。続いて休み時間

優太や新之助と話している俺の元に、ツカツカと宮永がやってくる

「あんだ名前は？」

「森崎だ。つかクラスメートの名前ぐらい覚えておけよ」

「あたし、興味ない事は覚えなから。あんだ達の名前も知らないし」

優太と新之助を見て、そう言う

「ハッキリ言うよね、宮永って」

さすがの優太も呆れ気味だ

「ふん……森崎ね。覚えてあげる」

「そりゃどうも」

俺がそう答えると、宮永は興味を無くしたのが自分の席へと戻っていった

「……でも、あれだけ自己中心的なのに」

席へと戻った宮永の周りに、女子達が集まる

「好かれてるよな」

ずる賢いと思せかけて意外とマヌケだし

「くしゅん！……風邪引いたかしら？」

八人目：屋上の女

昼休み。俺は購買でパンを買い、一応立入禁止の屋上へと向かう

ジャムパンとメロンパン。後はツナサンド

焼きそばパンが欲しかったが……

メロンパンにかじりつき、屋上へのドアを開けると

「……………」

「……………」

曇り空の下、屋上のフェンスを乗り越えて立つ女と目が合った

長く、ボサボサな髪は女の表情を隠しているが、多分俺と同じ表情をしているだろう

よーするに

「勘弁してくれよ……………」

久しぶりに来た屋上だったのに

俺はため息を付き、屋上内へと入る

「こ、来ないで……………下さい」

風が無い為、かろうじて聞こえた小声

「来ないでって言われてもな、今から飯食うし」

「べ、別の所で……」

「ま、気にするな。俺もお前を気にしないから」

屋上に唯一あるベンチ。そのベンチを利用してフェンスに登ったのだらう、ベンチのすぐ後ろに女はいる

俺は女を意識しない振りをして、そのベンチ近付き、ドカッと座った

「……」

「ジャムパン食う？」

「い、いりません」

「そうか？ 結構美味しいのに」

「……」

「お前、一年？」

「……」

「違ったか？」

「………そうです」

「そうか。……学校嫌いなのか？」

「……………」

「つか、好きな奴も余りいないよな。じゃ、お前何が好きなんだ？」

「え？ な、なに」

「俺はそうだな……こうやって空の下で飯食うの結構好きだぜ。後、スカル。知ってるか？ スカルクラッシュャー」

「ご、ごめんなさい」

「なら、今度聞かせてやるよ。って、俺の話ばかりじゃねーか。お前の好きな事を聞かせろよ」

「わ、私……は……お料理」

「そうか。じゃスカルのアルバムと交換だ、明日弁当を作って来てくれ」

「そ、それは……………」

「約束だ。……ところでお前、めっちゃ震えてるな？ そっち行っ
ていいか？」

「だ、だめ……………です」

「行くぞ。俺は…………俺が、お前の側に行く」

女を真っ直ぐ見て、目を逸らさせない

「あ……………」

俺は女が戸惑っている間にベンチの背もたれに足をかけ、フェンスを登る

「今日、雨降りそうだな。明日とか晴れっかな？」

「……………っ！？ 来ないで！！」

「おせえよ」

フェンスの頂上から飛び降り、女の横に立つ

「あ、ああ!？」

「と、逃がさねえって」

軽いパニックを起こした女の体をきつく抱きしめ、離さない

「夏だつてのに、お前の体超冷て〜」

「あ、ああ……………うああ!」

「何があつたのかわらねーが、暇な俺が話し聞いてやるよ」

それから10分。チャイムが鳴り、今だ泣きじゃくる女を抱きしめている訳だが……………

早いところフェンスの内側に戻らせてくれねえか………こえーし

「で、どうしたんだ？」

五時間目開始のチャイムが鳴った後、大分落ち着いた女に尋ねる

「……………」

「……………えつとな、俺は一也ってんだけど、お前は？」

「……………柊です」

「柊？ 名前？」

「……………はい」

「柊か、良い響きたな。冬生まれ？」

たく、もっと気の利いた事言えねーのか俺は？

「12月……………です。あ、ありがとうございます」

「ん？ ああ」

「……………」

「……………な、理由話してくれねえか？ 俺には沢山の弟子が

居るから、何かの役に立つかもしれないぞ」

「……………」

「…………イジメか？」

「ち、違っ」

「本当か？」

さっきから気になっていたが、柊の手の甲にシャーペンで刺された様な傷が幾つもある

それを指摘すると、柊はビクッと体が震わせた

「言えよ、柊」

「……………」

「会って間もないけどよ、俺を信じる。俺は女の涙を晴らす男だからな」

…………あれ？ この台詞、なんか嫌なデジャヴが…………

「…………私、クラスで」

五時間目終了のチャイムが鳴る頃、柊の話聞き終えた

「…………ひでえな」

話を聞くと、柊がクラス内で聞いているだけでも腹が立つ、酷いイジメを受けている事がわかった

「よし、分かった。何とかしてやるよ」

俺のカプセル怪獣である新之助を使おう

「え？ で、ですが……」

「でもな、イジメは無くなるだろうがクラス内では暫く気まずく、辛いかも知れない。勿論俺も出来るだけ助けるが、基本はお前次第だぞ？ 頑張れるな？」

「わ、私は……」

「頑張れるな！」

反論を許さない強い口調で言う。強引でも頷かせてしまえば、少しは自殺を思い留ませる鎖になるだろう

「……は、はい」

「よし、なら任せろ」

薄情な様だかそれでも自殺をするなら、もう俺の知った事じゃねえ

「しかし、柊は髪なげえな。取り合えずきつちりビシッと切って、気持ちも髪もスッキリしてみようぜ？」

俺は柎の前髪を掻き分けて……………

「あ……………う……………」

「……………え〜」

ボサボサの髪を掻き分けて現れたのは、超絶な美人顔だった

「……………お前、ベタだなあ」

「い、ごめ……………なさい」

「まあ良いや。じゃ、行くぞ？」

「え？ ど、どちらにですか？」

「俺のクラスだ。カプセル怪獣を用意してくる」

んで、俺のクラス

廊下で柎を待たせ、新之助に事情を話す

「イジメだと！？ うおおおおお！…」

目を血走せ、吠える新之助

「こ、声でけえ！」

「む、すまん……イジメか……イジメ!? ふざけるなあああ!!」

「と、取り合えずクラス出ようぜ。人を待たせてあるんだ」

「しかし、六時間目が……」

「……イジメ」

「うおおおお!! 行くぞ森崎イイ!!」

新之助は教室を飛び出して行った

「……後、頼むな優太」

「あいよ。行ってらっしゃい」

廊下で暴れる新之助と、怯える柊を捕らえ、再び屋上へと行く

「此処か! 屑共がいるのは!?!」

「落ち着けて。六時間目が終わったら直ぐ乗り込むから」

「分かった! 早く終わらせる!!」

ボキボキと指を鳴らす新之助

「……無理言つなよ」

新之助は空手部の主将であり、剣道の段も持っている猛者だったりする

しかも親父は警視庁の警視様、兄貴は弁護士、母親は病院の婦長と、基本的には余り近寄りたく無い類の一家だ

だが……

「悪いな新之助」

こんな時ばかり利用しちゃって

「ん？ 良く分からんが気にするな」

「借りは返すからよ」

それから柘に詳しく話を聞き、気付けば六時間目終了のチャイム

「じゃ、行くぞ」

「おう！」

「……………」

震えている柘

「……………行くぞ、柘」

お前は起きる結果を近くでしっかり見なくちゃいけない。そうじゃないと多分、次何かあってもまた自分で解決出来なくなる

ま、とにかく

「俺はすごぶる機嫌が悪いぞ、ガキ共が」

1 - C。柵のクラスだ

放課後のホームルームが終わり、教室内が騒がしくなる

俺達は廊下で待機し、教師が消えるのを待つ

「んじゃ、また明日な〜」

最初に教室から出て来た頭の悪そうな野郎。俺はソイツの前に立つ

「おい、てめえさ、教室入れよ？」

「は？ なにアンタ？ 邪魔なんだけど」

「年上に向かって何だその口の聞き方は！」

新之助が吠える。……もう少し静かにしてくれないだろうか

「又ウウ！」

唸りながら恐ろしい目で睨みつける新之助

……こ、怖いな

「た、田村先輩！？ す、すみませんでした」

「分かればいい。さっさと教室に入れ！」

「はい！」

異変に気付いたのか、教室内が騒がしくなる

「……何やってるんだ、お前ら」

そして教師もそれに気付いた

「……たく、肝心な事は気づかねえ癖によ」

「な、なんだその目は！ 私は此処で何をしているんだと聞いているだけだぞ！」

「……………」

「答えなさい！」

「あ、一也！ こっちのクラスだよん」

教師と睨み合っていると、突然後ろから声を掛けられ、そのまま首に抱き着かれた

「美鈴！？」

「も〜。またクラス間違えるんだからあ」

いつになく甘い口調だ

「も、森崎！？ 破廉恥だぞ！」

「……………学校内であんまり目立つ事するんじゃないぞ」

呆れた顔をし、教師は廊下を歩いて行った

「……………ありがとな美鈴。つか良く分かったな？」

「よく分からないわよ。でも何年幼なじみをやっていると想っつ？
— 也のピンチぐらいは分かる」

「……………助かった、ナイス幼なじみ」

親指を立て合い、コツンと拳を合わせる

「それじゃーね、一也」

「ああ、気をつけてな」

俺達が別れの挨拶をしている間、新之助は勝手にクラスを仕切っていた

「良いか、俺達の話が終わるまで一步も教室に出るなよ」

「ぶ、部活があるんですけど……………」

「何部だ？ 後で俺が話をつけてやる」

「い、いえ……大丈夫です」

新之助の事を知っているのか、誰一人反抗しない

俺は柊を連れ、教室内へと入る

「ありがとな、新之助。……えっと、お前らに話が有るのは俺なんだけどさ、お前ら俺の女に嫌がらせしてるらしいな？」

「お、女！？ も、森崎いつの間に……」

新之助は目を丸くして驚く

「ち、ちよつと黙っていてくれ」

新之助が会話に入ると話が進まない

「……えっと、こいつが俺の女で柊。知ってるだろ？ 当然」

教室内に戸惑いとざわめきが湧く

「人の女にさ、随分散々な事してくれたらしいじゃねーかコラ？」

「ち、違うんすよ、別に俺達は……」

「森崎が黙れと言っていただろう！」

新之助が机を叩く。その机は信じられない事に、真っ二つに割れ、パイプが歪む

その衝撃にクラス内は凍り付き、張り詰めた静けさに包まれた

「……………し、新之助。ちょっと抑えような」

「ぐぬぬ！」

相当怒っているな、こいつ

「……………いいか、無理に仲良くしろとは言わねえ。だがな、無視をしたり、陰口を叩いたり、嫌がらせを試してみろよ。学校に居られなくすんぞ？」

「町にも居られなくしてやるっ」

新之助が付け足す

「……………お前が言うത്マジっぼくて怖いな」

「……………も、申し訳ございませんでした」

「に、二度しません、許して下さい」

クラスのあちこちから、そんな声が上がった

それを震えながら、泣きながら、それでも俯かないで聞く柊

……………これで解決か？

いや、今迄よりはマシになったぐらいだ

きつと、これから先も柊はクラスで孤立してしまっただろう

ただどな、生きていればいつか打ち解け、仲良くなる事もあるかもしれない

新しい本当の友達が出る事もあるだろう

それに

「俺達が居るから」

頑張れよ、柊

泣きながら頷く柊の頭をポンッと叩き、俺は新之助は何と無く笑いあった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6946y/>

森崎ハーレム

2011年11月22日03時58分発行